

(要約版)

南コーカサス周辺におけるワイン文化の考古学的研究

研究助成者 小泉 龍人(東京大学東洋文化研究所)

1. 研究目的

本研究は、世界最古のワインの誕生地として有力視されている南コーカサスのワイン文化について、酒器として使われた可能性の高い土器を考古学的に考察し、人類史における嗜好品の変遷の一端を明らかにすることを目的としている。農耕・牧畜、冶金技術、都市、文字など、歴史上のさまざまな発明のルーツはオリエント世界の西アジア地方にたどることができる。酒の起源として、ワインとビールもオリエントの事例が最古級とされ、オリエント北端の南コーカサスでワインが誕生したとされる。これまで古代ワインの研究は欧米の学界が主導してきたため、本研究は、日本人による古代ワインの研究として、当該遺跡の現地調査、ワインに関連するとされる酒器（土器資料）の理化学的分析に挑戦する。

2. 研究方法

本研究の手法として、現地調査と理化学的分析を実施することにした。まず、現地調査として、ジョージアの新石器時代から銅石器時代にかけて（約 8～5 千年前）の遺跡を巡検し、ワインの生産・流通・消費などに関連すると推定される遺構や遺物を実見する。ワインづくりに使われた可能性のある資料の情報収集とともに、分析目的の資料持出し許可を申請する。つぎに、日本国内の研究機関に委託して、有機物分析などのさまざまな理化学的分析を試験的に実施する。おもな分析方法として、熱分解-GC/MS 分析、IR スペクトル分析などを用いる。さらに、南コーカサスに隣接するトルコ共和国で発掘した関連資料についても各種分析を試みる。

3. 研究成果

現地調査の成果として、トビリシ（ジョージア）に出向いて実地踏査を行った。おもに、ワインの起源に関連すると推定されるシュラヴェリス・ゴラ遺跡、イミリス・ゴラ遺跡、フラミス・ディディ・ゴラ遺跡などを巡検して、遺跡の地形的環境や帰属年代などについて概略的な情報を把握した。とくに、ジョージア国立博物館とトロント大学が共同発掘しているガダチュリリ・ゴラ遺跡で出土した土器資料に関して、交渉の末、新石器時代の粗製無文土器片 2 点を日本に持帰ることに成功した。今回は、ガダチュリリ・ゴラの土器片と、サラット・テペ遺跡（トルコ）で発掘した銅石器時代の土器片 2 点もあわせて、ワインの色素に注目した熱分解-GC/MS や IR スペクトルなどの理化学的分析を実施した。

分析の結果、残念ながら、いずれの試料からもアントシアニンに関連するシリング酸やアニソールなどの芳香族化合物、酒石酸などの有機酸類を検出できなかった。数千年前の土器に付着していた有機物の多くは、土中に堆積している間に分解・変化してしまうため、今回の分析用試料にはほとんど残存していなかったのではないかと考えられる。また、ガダチュリリ・ゴラ出土土器片についてワインに関連する酵母菌の解析を委託したものの、酵母菌の回収はできなかった。さらに、サラット・テペで出土したワイン用に使われていた可能性のある「ブドウ房状装飾」土器片に関連する層位について、炭化物の放射性炭素年代測定を委託した。測定の結果、当該土器片の出土した層位の年代は、ほぼ紀元前 4695～3830 年までの幅に収まることがわかった。

4. 考察

本研究の成果として、サラット・テペの「ブドウ房状装飾」土器片の出土した層位の年代がほぼ 6000 年前（前 4 千年紀初頭）であるとわかった。ガダチュリリ・ゴラでも類似した土器片が見つかっている。両遺跡は直線距離で 500 キロメートル以上も離れており、帰属年代が大きく異なるが、新石器時代から銅石器時代にかけての南コーカサス周辺の社会変化を考古学的に捉えるうえで重要である。もし、北メソポタミア・南東アナトリアのサラット・テペ出土品が搬入品ならば、由来候補地として南コーカサスが有力であり、先行研究でも両地域間に新石器時代から文化的なつながりがあったことが指摘されている。

6 千年前のウルク期（後期銅石器時代）になると、メソポタミア周辺で陸路による交易が活発になり、ブドウ房状装飾の施された酒器が南コーカサスから交易品の一つとして、メソポタミア周辺へ流通したと考えられる。メソポタミア周辺に流通したワインは嗜好品としてではなく、都市的集落に出現した神殿の祭祀儀礼で「献酒」「灌奠^{かんてん}」などの場面に用いられた。つまり、ワインは御神酒として利用され、世界最古のメソポタミア都市文明の形成において、きわめて重要な役割を演出することになったと考えられる。

5. 小結と今後の課題

本研究の結果として、ジョージアのワイン関連の諸遺跡を巡検するだけでなく、ガダチュリリ・ゴラ遺跡で出土した貴重な土器片を分析試料として持帰ることができた。熱分解-GC/MS 分析や IR スペクトル分析などを実施したが、赤ワインの色素に由来するフェノール性化合物や芳香族化合物などの熱分解生成物や、酒石酸などの有機酸類を検出するには至らなかった。年代測定の成果により、南コーカサスから北メソポタミア・南東アナトリアへ「ブドウ房状装飾」土器を伴うワイン文化の拡散を推定できた。今後の課題として、人類史上の嗜好品の誕生と展開に関する研究の継続自体が求められる。古代ワインの起源を研究する上で理化学的手法は欠かせず、より高感度の LC-MS/MS（液体クロマトグラフィー質量分析）を使った分析、現地における分析用試料の再入手が必要となる。